

も多いのではないのでしょうか。HANDS プロジェクトでは県内の日本語教室担当教員を対象にアンケート調査をおこない、どのような教材が多く利用されているか、また選んだ理由や教材の持つ特徴などについて把握しました。その後「外国人児童生徒支援会議」の場において、実際に使用している教員による教材紹介を行うことにより、それらの情報を広く共有する機会を設けました。

本書では、以上の過程を経て広く皆さんに紹介すべきであると判断した教材を選出・紹介しています。日本語指導に関するテキストも、学校の指導形態や子どもの実態に合わせ、読み書きを中心にしたものから表現活動を中心としたもの、そして会話を中心としたものなど多岐にわたっています。その他、漢字指導や作文指導に関するテキスト、担当教員による自作教材も紹介しています。また、特別支援教育分野の教

材を活用することも提案し、指導者のアイデア如何では既存の教材も有効に利用できることを示唆しています。外国につながる子どもの教育に必要なのは特殊技能や専門性ではありません。指導者は使いやすいテキストを通して「いかにして子どもとの距離を取り払うか」が重要と考えています。本書で紹介した教材のどれもが、読者の皆さんにとって外国につながる子どもの教育の良き「入り口」になり得ると確信しています。

『教員必携 外国につながる子どもの教育 3』は、6 月中に栃木県内の小中高等学校および各教育委員会や図書館などに配布予定です。また、個人的に活用を希望される場合には無料で（送料のみのご負担）提供していますので、HANDS プロジェクトホームページ「だいじょうぶ net」の「お問い合わせ」からご連絡ください。

再会 ～ 2013 春ペルー調査報告～



宇都宮大学国際学部講師 スエヨシ アナ

2008 年、2009 年に実施したペルー調査では、帰国後のペルー人労働者の子どもたちの教育・生活状況を追跡した。そして、心理学的なアプローチをすることによって子どもたちが教育・家庭環境にどのように適応していくのかを明らかにするように努めた。その継続調査として、2011 年 3 月にペルーに帰国した生徒の進学・就職の実態把握を目的とする聞き取り調査を実施した。翌年 8 月の夏休みにはフォローアップ調査を行った。

毎回の調査で対象者にインタビューをする度に同じ疑問が浮かんでいる。それは、「かれらが受けてきた教育はかれらの進路選択にどのような影響を与えているのか」ということである。

2011 年 8 月リマ市の某日系人学校で、卒業を

控えた 3 人の男子生徒に出会った。彼らは 2008 年のリーマンショックの影響により親とともに強制的にペルーへ帰国しており、比較的ペルーでの滞在年数が短い 3 人であった。馴染まない環境に嫌悪感を浮かべ、教室の一番後ろの席に座り、お互いに日本語で話し合うことで他の生徒・教師と壁を作っていたという印象であった。スペイン語能力は不十分で、ペルーの教育制度に対する意識は低く、そしてペルー社会へは無関心であり、校内で際立った存在であったようである。

かれらに接近すると一人は戸惑い、会話を敬遠するかなのような仕草を見せたが、次第に壁が崩れていった。そして、一人が話し始めた。2008 年のクリスマスに親の都合でリマへと帰国した。居たかった国から連れ出され、戻りたく

ない国に戻り、話したくない言語を無理に話した。両親から母国であるペルーへの帰国理由を聞かされたが、かれ自身納得が出来なかった。かれは、自分自身で決断できない悔しさがあった、と説明をした。

進路について聞くと、親は日本語能力を活かせる通訳・翻訳業、観光業の分野への進路を希望していた。しかし、親は、卒業まで残り半年という時期に、その分野での勉強が出来る大学や専門学校を知らなかったのである。ペルーでの進学に関する情報を知らなかったため、メールで情報提供をしたところ、予想外にも返信をくれた。大学入試に向けて生徒のスペイン語能力に不安を抱えながらも、半ば納得した様子で情報提供した大学のHPを調べると述べていた。この出来事から3週間後、同国リマ市で合流したHANDSプロジェクトの田巻教授と若林准教授が某日系人学校を訪れ、本人と話をすることが出来た。かれは、意外にも素直に打ち解けている感じであった。

今年、リマ市で継続の「2013 春調査」を実施した際、日秘文化会館を訪問し偶然にもエレベーターでかれと再会した。約1年半ぶりのことであった。眼鏡をかけ、元気な声で呼び止められ、挨拶をされた。正直、嬉しい出来事であった。その場でかれと15分程度雑談をすることが出来た。日系人学校卒業後、薦めた大学の情報学部に進学し、現在無事に2回生であること、また、

日秘文化会館で日本語教師の資格を取得するために養成講座を受講していることを話してくれた。

高校時代の他の2人の同級生に関しては、残念ながら2人とも卒業後日本に戻り、進学ではなく単純労働者として働いているということがわかった。これを聞いたとき冒頭のあの質問が浮かんできたのである。「かれらが受けてきた教育はかれらの進路選択にどのような影響を与えているのか」と。どうして他の2人は進学せずに日本へ戻ることになったのか。親または学校の支援体制が不十分だったからなのか。それとも、生徒自身のモチベーションが不足していたからなのか。

再会でできたかれは、述べたようにペルーの私立大学の2回生となり、自分の将来に対してポジティブに考えており、自分にも自信を持っていた。そして、次のように語ってくれた。ペルーに帰国してからHANDSプロジェクトのメンバーを含め様々な出会いがあり、話をすることによって「進学」についての刺激をもらい考えさせられた。「ペルーという国は知ると楽しい。いい国です。」と言い切っていた。まだスペイン語能力が不十分でありながらも同級生の協力を得ながら勉強に励んでいるようである。

日本へ戻ると決心した高校時代の同級生の選択、そしてペルーに残って進学の道を歩んでいるかれの選択、その理由や背景について追跡中である。

ブラジルに帰国した子どもの教育事情 (ブラジル調査報告)



宇都宮大学国際学部特任准教授

若林 秀樹

中学校で日本語教室担当教員をしていた12年間のあいだに、私はたくさんの外国につながる子どもとの別れを経験しました。保護者の意思で来日し、再び保護者に連れられ祖国に帰っていく彼らは、彼の地での希望にあふれている子

から、自身の意思に反し泣く泣く帰国する子まで様々でした。別れに際して、もう二度と会うことはないのだろうという寂しい思いも当然ながら、私はいつも「中学の途中で教育制度の違う母国に帰るこの子の将来はどうなるのだろう」